HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人格･ペルソナについて
Author(s)	木村, 晶子
Citation	基督教学, 33, 21-23
Issue Date	1998-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46592
Type	journal article
File Information	33_21-23.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

人格・ペルソナについて

木村晶子

現在、人格（ペルソナ）という概念はどのように、解釈されているだろうか。デカルトが「考える」自己意識を強調して以来、人格も精神的実体の自己意識、自己閉鎖的な自己意識と解されており、実存主義者にあっては人格とは関係性であるとしている。しかし、「ペルソナ」という本来の意味を考察するにあたっては、やはり、六世紀にボエティウスが唱え、トマスにも受け継がれた人格の定義、すなわち、「知的本性をもつ個別的実体」という概念をもう一度分析する必要があるように思われる。

まず、「知的本性をもつ個別的実体」のうち実体とは何か、その性格について触れておくべきであろう。トマスによれば、第一の実体の意味は基体として自立できるもの、自存できるものの意である。それゆえ、実体は自己に内在する種々の附帯性をも支えることができる。さらに、理性的な諸実体にあっては、個別的・個体的なものが尚一層、特殊な完全な仕方で見い出されるのであって、これらの諸実体は、自らの行為に対する自主性を有し、理性のないもののように単にはたらかされるだけではなく、自らによってはたらく。(S.T., Q.29, a.1) したがって、主体 suppositum とも名付けることができる。こうして、実体は、「実在を表示する名称」として、「それぞれのもの」res naturae・「自存体」subsistentia・「ヒュポスタシス」hypostasis と呼ばれるが、これら三つの名称が実体という類の全体にわたって、共通的・一般的に表示しているものを、理性的実体という類に限って表示するものが、「ペルソナ」と呼ばれる。(S.T., Q.29, a.2) ゆえに、ペルソナはその独自の存在を表し、自身で考え行動し、自身の権利と責任を持って行動することを意味する。また、自存という完全性の性質から、他者とは分かち得ない (incommunicabile) ものであるという結論が引き出される。このペルソナの非共通性は、キリスト教の伝統的な考え方であり、トマスや他の中世の神学者も強調した点であった。

また、トマスは、実体のダイナミックな概念を強調した。即ち、実体は、「それ自体において」と「他者に向かって」という両極から成り立つと唱えたのである。この根拠となるのは、トマスにとって重要な存在概念、真の現実態としての存在、「エッセ」である。この「エッセ」には、その本性そのもののうちに、汲み尽くされない内的ダイナミズムがみなぎっているのである。「真に存在する」とは「現実態であること」・「動的現存」つまり、「エッセ」であり、エッセはエンスを自己完成へと駆り立てる。すべての実在的存在はエッセによって、有限とはいえ、本性的に現実態として働き、その本質に従って行為・行動を決定するのである。トマスによれば、agere sequitur esse, operari sequitur esse であり、働きや行為もすべてエッセによるのである。このように存在の中心はエッセであり、それはすべての活動や発動の動的原理であるが、エッセはその基体として実体を必要とし、そこから行為・働きが実体の存在と本質の表現として生まれる。こうしてトマスによれば、エッセと実体と行為とは密接につながっているのであって、これらを別々にして存在の有り方を考えることはできない。このような「実体」像はデカルトの「思惟する実体」という定義以来縮小され、自己閉鎖的・自己充足的なものであり、関係は偶然的なものにすぎなくなってしまった。さらにロックにいたっては、実体は不活性であり、不可知のものという定義になり、実体内部においても他者との関連においても動的自己伝達的関係性がない。それ以後、実体は本質的に不活性で、受動的基体であり、存在においては変化しないものという概念が深く西洋の思想の中に根付いてしまったように思われる。そのため、今日の多くの思想家たちは、実体を、活動や関係性に対立するものとして否定してしまう。しかし、中世における実体の考え方はもっと奥深いものであった。

このように、トマスに従えば、ペルソナはエッセに基づいた実体であり、自立した、行為の責任を果たすことのできる、知性的本性ということになる。しかも、エッセはすべての完全性の源であるから、ペルソナは存在そのものの完全性であるということになる。トマスの存在論からすれば、一〇〇%現存している、現実態であると

いうことが本来、ペルソナであるということである。ペルソナは質料的レベルの存在を超えた存在そのものであり、知性と意志によって自己表明し、行為を通して他者に自己を伝達してゆくのである。従って、ペルソナは本質的に関係性を有することになり、「関係における実体」とも言える。これは神と他のあらゆる存在するものに(類比的に異なった様相ではあるが)共通の真であり、神性にも、有限の似姿にも言えることなのである。それは、すなわち、神が「エッセ」そのものであり、ペルソナの関係性は、同時に神のペルソナに基づくからである。

さらに、付け加えておきたいことは、関係においては「受容」という行為も重要な役割を果たしているということである。単に自己を与えるという行為だけでは真の対話的関係にはなりえない。受容する行為があってはじめて真の関係、真の交わりが成立する。この点から、ペルソナとは愛することであると言える。即ち、自己譲与と受容性の両極を生きることである。譲与と受容性は共に等しい重さをもった完全性なのである。ゆえに、ペルソナという完全性は、愛における交わりをもって最高点に達するのである。その最高の模範は、神の三つのペルソナの相互愛である。この意味でペルソナは一人では形成されることはなく、〝われわれ〟という関係に入らなければならない。従って、ペルソナそのものは友情・共同体・社会などを必然的に求めてゆくのである。

結論として、ペルソナは内的ダイナミズムを持ったエッセから成り立ち、そこから他者へと向かう関係性が生まれる。従って、人格(ペルソナ)の充実の度合いは、エッセの有り方に比例すると言える。ヨゼフ・ピーパーもこの点を強調して、「存在の有り方が、本質的になればなるほど、現実への関係度は高まる。……そして、このような関係が現実の世界により深く浸透すればするほど、行為者の存在はさらに本質的になってゆく」と述べている。それゆえ、人格(ペルソナ)の完全性の開花は、他者とのかかわりによって、いかに大きく自己超越できるかにかかっている。